

歴史の中の女たち <第8回>

ソル・フアナ

伊藤 滋子

1669年2月メキシコ市において、副王夫妻、高位聖職者、政界の有力者、家族が見守る中、21才のフアナ・イネス・ラミレス・デ・アスバへは修道女となる誓いをたて、聖へロニモ会の修道院に入った。名前もソル（修道女）・フアナ・イネス・デ・ラ・クルスと改め、この後26年間この建物から一步も出ることなく生涯を終え、教会の床に埋葬される。美しいとはいえ、名門の出でもなく、裕福な家の子女でもないというのに、なぜこれほどの名士が集まったのだろう。

フアナが生まれたのは、メキシコ市郊外の農村ネパントラの近くで、スペインから渡ってきた祖父が教会の土地を借りて経営していた農園であった。3才の時、姉について寺子屋に通ううちに先に字を覚えて先生を驚かせ、8才で宗教詩を編んで近隣に知れ渡るほどの天才であったが、家庭的には恵まれなかった。姉が二人いたが彼女が生まれて間もなく、母親はスペイン人の隊長であった父と別れ、別のスペイン人隊長がその座を占め、第一人、妹二人が生まれた。母親は文盲であったが、祖父の死後、遺された農園をひとりで切り盛りするほど気丈で、今も中南米に伝統として残る母系社会の典型的な母親であった。姉をはじめ一族の多くの女性がこのような生き方をするが、それが非難されたり、



負い目となったりすることはなく、社会的に容認されていた。ただ修道院に入るには正嫡である必要があったから、フアナはこの時初めて顔も知らない父の姓アスバへを用いた。

フアナの知的好奇心を醒ませたのは、祖父の蔵書だった。旺盛な知識欲から、男装して大学に行きたいと言い出すほどであったが、所詮無理な話とわかったと、祖父の書斎にこもり、その蔵書を片っ端から読んだ。頭が悪くなるからと、好物のチーズを食べなかったり、何かを憶えられない時には髪の毛を少

しづつ切って自分を罰するという努力家でもある。祖父が亡くなり、異父弟が生まれた8、9才の頃、彼女はメキシコ市の母方のおばの家に預けられた。多感な少女時代を他人の家で過ごさねばならなかったが、ここでも知識欲が彼女の孤独を癒し、心の支えとなる。裕福なおばの夫はフアナにラテン語の家庭教師をつけてくれ、彼女はたった20回の授業でラテン語文法を習得した。大学には行けなかったが、この基礎があったおかげで、あとは独学で学問を身につけることができた。

フアナが美しく成長した15、6才の頃、おばの夫は彼女を着任したばかりの副王、マンセラ侯爵に紹介した。副王夫妻が彼女をすっかり気に入り、女官として採用されたことから運命が急転する。文学好きの副王夫人はフアナのたぐいまれな理解力や学識をいつくしんで彼女を話相手とし、良きパトロンとなった。フアナは義務的な仕事を課せられることもなく、宮廷という恵まれた環境の中で第一級の文化人と交わり、思う存分勉強し、詩作の修行に打ちこんだ。これまで家庭教育を含めて教育らしい教育を受けなかった彼女にとって、宮廷は学問だけでなく、作法や社交、処世術など、生きて行く上で必要な諸々の知恵を身につける絶好の場でもあった。

何十年も後にマンセラ公が当時のことを懐かしんで愉快気に語るには、宮廷に40人の神学者、哲学者、数学者、歴史家、詩人、人文学者などを集め、彼女の学識を試させたことがあった。学者たちはそれぞれの専門分野の質問を浴びせかけたが、彼女はそのどれにも才気溢れる答弁で回答し、賞賛と尊敬を勝ち得て、魂に性別はないことを証明して見

せた。それほどの知性と学識に加えて、天性の明朗な性格と美貌に恵まれていたのだから、宮廷の人気者となったのは当然である。

ところが20才の時、フアナは突然この華やかな生活を捨て、カルメリータ会修道院に入る。彼女を僧院に向わせたのは失恋や叶わぬ恋だったという説もあるが、それは多くの恋の歌を書いているからで、その説を証明するものは何もない。当時女性の選択肢は限られていた。結婚するためには家柄や持参金が必要だったが、それがなければ、彼女の母親のように内縁関係に入るか、娼婦になるか、あるいは僧院に入るしかない。人々は死後の魂が最後の審判を受けると信じていたから、魂の救済のために祈りを捧げて貰おうと喜んで修道院に多くの財を寄進した。フアナは熱烈な宗教心からというよりも、職業として修道女になることを選んだのだ。

しかし最初入ったカルメリータ会修道院はあまりにも戒律が厳しく、彼女は健康を害して数ヶ月でそこを去り、再び宮廷に舞い戻った。一年後、彼女が尊敬していた、聖人の誉れ高いイエズス会士ヌニェス神父がもう一度修道院に入ることを勧めた。結婚できない若い女性にとって、それが最良の方法であると固く信じていたからだ。フアナは自由に学問が出来なくなることを恐れたが、「宗教的な義務が学問の妨げになることはない」と論じ、さらに彼女が「幼少の時から親しみ馴染んできた書物を捨てて行かねばならないではありませんか」と聞くと、「教会は常に修道女が学問することに好意的であった」と応えて彼女を安心させ、敬虔な篤志家に彼女の修道院への持参金を出させる約束をと

りつけた。そして選ばれたのが、戒律の比較的緩やかな聖ヘロニモ会修道院であった。

この修道院はメキシコ市の中にあり、広大な敷地を有している。修道女が寝起きする独居房は寝室のほかにトイレ・台所を備え、多くは広々とした二階建てで、3人から5人もの召使に身の回りの世話をさせる修道女もいた。ソル・フアナの独居房も二階建てで、奴隷が一人いた。料理も食事も大食堂ではなくそれぞれ自室です。部屋は敷地の中に新しく建てられたり、売買されたり、賃貸されたりした。修道院は少女たちに学校教育を施し、行き場のない女性を収容する養護施設でもあったから、修道女以外にも多数の女性を住まわせている。当時 87 人の修道女がいたというから、召使、奴隷の数は約 200 人、それにこれらの女性を加えれば、男性の姿がないだけで、小さな町の規模である。そこには閉鎖社会ゆえの嫉妬、陰謀が渦巻き、俗世間と変らない事件が起こった。僧院長、副院長をはじめさまざまな役職があり選挙で選ばれたが、ソル・フアナは後年会計係を務めた。入会時の持参金は半分が生涯の生活費、半分が投資に回され、修道女たちは結構な配当を得ていた。会計係として9年間も資産運用を任された彼女には実業家の才があったとみえ、自己資産もうまく運用してかなりの資産を蓄えた。裕福な修道女たちが清貧の誓いも何のその、宝石や衣装を競い合ったり、贅沢な生活に走ったりするなかで、彼女のお金の使い方は書籍が主で、あとは幅広い交際に必要な贈り物、あるいは親戚の若者への援助などで、修道院の補修のために私財を投じたことも一度ならずあった。建物の維持や普請の

監督も会計係の仕事である。

清貧の誓いはともかく、外出だけは絶対に許されなかったが、客の訪問は認められていたから、世間から完全に隔離されていたわけではない。マンセラ副王夫妻も文学を愛好する人々を引き連れて足しげくソル・フアナを訪問し、文学や哲学談義が交わされたり、詩が朗読されたりして、修道院の談話室はサロンと化した。数年後にはマンセラ侯爵も任期を終えて帰国したが、その後も高位聖職者や有力者、文化人などが彼女を訪れて友好関係を結び、聖ヘロニモ修道院は信仰とはあまり関係のない知的な文化の発信源となった。彼女の詩人としての令名もますます高まり、新しい副王が着任するごとに歓迎の詩の制作を依頼され、教会の祝祭日で信者に歌われる小唄、宮廷の行事のための詩を作り、ゆるぎない宮廷詩人としての地位を築いていった。

ソル・フアナは歴代の副王から愛され、庇護されたが、とりわけ彼女に大きな影響を与え、心からの友情を結んだのは、1680年から6年間メキシコ副王であったラ・ラグナ侯爵の夫人、マリア・ルイサである。着任後まもなくの彼女の寵を得たソル・フアナは、さまざまな機会を捉えては、絶世の美女であった夫人の美貌を讃える詩を贈り、そのお返しに贈られてくる品は彼女の部屋にうず高く積み上げられ、訪問者の好奇心の的となった。勿論それは副王夫人と宮廷詩人という主従関係に違いなかったが、互いに聡明で非凡な才能の持ち主であった二人の間にはそれを越えたプラトニックな心の結びつきがあったことが、数多い詩の中にうかがえる。この6年間でソル・フアナの人生のうちで最も幸

せで充実した時だった。夫人はスペインに帰国したあとも熱心なパトロンとして彼女を応援し、その尽力でマドリッドで作品集が出版され、ソル・フアナの名は一躍スペインおよび南米各地にとどろいた。

本稿冒頭の肖像画の背景は数千冊あったという蔵書が並べられた書棚であるが、自身で購入したもの以外にも、寄贈された書籍も多かったはずだ。好奇心旺盛な彼女は文学と哲学だけでなく、科学や天文学にも興味を持ち、書籍のほかにも楽器や科学機器、定規、ファンから贈られた珍しい品物などを所蔵していた。これらの収集品に囲まれて、静寂の中で魂を解放しながら執筆や読書で過ごすのが彼女の理想とする生活であったが、突如としてそれが崩れる日がやって来た。彼女はあらゆることに闊達な意見をのべたが、神学論争だけは注意深く避けてきた。宗教裁判が恐ろしかったし、教会とことを構えたくなかったからだ。

ところが友人のプエブラ司教サンタ・クルスとの気安さからか、高名なイエズス会士ビエイラの論を批判し、それが公表されてしまった。うかつにも虎の尻尾を踏んでしまったのだ。メキシコ大司教アギアル・イ・セイハスは貞潔を守る余り極端な女性嫌いで、同じイエズス会の尊敬する先輩が女性から受けた批判を非常な侮辱と感じた。それまでも、修道女でありながら臆面もなくエロスに満ちた詩や劇を書く彼女の世俗的な文学活動を日頃から苦々しく思い、ソル・フアナの聴聞師ヌニェスを通じて、それを止めさせようとしていたが、副王の手厚い庇護を受けていた彼女は柳に風とそれを聞き流し、ヌニェス

も彼女を見放して手を引いてしまっていた。プエブラ司教とメキシコ大司教の勢力争いがこの一件の背景にあり、ソル・フアナはそのとばっちりを受けたという側面もある。

しかし 1692 年、メキシコ市で食料不足から暴動が起こり、それを抑えられなかった副王の権威は失墜、代わって大司教が宗教の力で民衆をなだめたため、両者の力関係が逆転した。副王もプエブラ司教も自分のことで精一杯で、もうソル・フアナを守ろうとはしなかった。それに追い討ちをかけるように彼女に大きな打撃を与えたのは、パトロンであったマリア・ルイサの夫、ラ・ラグナ公の急逝であった。相次いで後ろ盾を失ってしまうと訪問客もばつたりと途絶え、小心な同僚の修道女たちも彼女に近寄ろうとはせず、ソル・フアナは極端な孤独に陥り、身の危険さえ感じるようになった。もうこうなっては妥協するしか道はなかった。ヌニェスに聴聞師として戻ってくれるように頼み、これまでの 25 年間修道女としてふさわしくない生活を送ってきたことを認め、赦しを乞うた。赦しの条件は、蔵書や収集品のすべてと共に文学を捨てることであった。当時有数の膨大な蔵書は二足三文で売り払われて逸散した。1 年間の試験期間の後、ソル・フアナは改めて修道女となる誓願書に署名したが、その翌年、疫病に罹った同僚の看病をしていて自らも感染し、46 才でこの世を去った。

ソル・フアナに興味をもたれた方は巨匠オクタビオ・パスが同胞の先達に敬愛をこめて肉薄した『信仰の罫』（土曜美術社・林美智子氏の力訳も素晴らしい）を一読されたい。

（いとう・しげこ）